

# 山崎郷土叢報

No. 66

60.9.5

兵庫県宍粟郡  
山崎町教育委員会内  
山崎郷土研究会  
電話②2000

## 近世初頭の山崎藩 (二十四)

島田 清

### 二、池田輝澄時代 (続二十三)

#### ○ 輝澄の発病

藩の記録がのこっていないから詳しいことはわからないが、輝澄は、この出府途中に発病した。どこで発病したのか、病名が何であったか、いっさいわからない。しかし、途中で、動けぬような重病になったのであれば、江戸まで来れるはずがない。江戸藩邸に着いてから病臥し、登城できない、というのは、この発病が、着府当日とか、その前日とか、ともかく、ひじょうに接近していたのではないかと思われる。

急出府で、夜を日について鵜籠をとばした結果、着府後、湯

### 目次

- 一、近世初頭の山崎藩 (二十四) …… 島田 清 …… 一
- 二、お稻荷さん物語 (上) …… …… 根岸元彦 …… 五
- 三、近世宍粟郡の耕地造成 (田井村の島田  
の場合) (上) …… 古文書研究会 …… 八
- 四、字地名「尼ヶ端」の伝説 …… …… 資料部 …… 十四
- 五、春の旅日記 …… …… …… 安井清介 …… 十四
- 六、事務局だより …… …… …… …… …… 十六

あみをしている最中に脳出血を起こし、そのまま、不帰の客となった例が、このときより一年前にあった。

輝澄の生まれた姫路城は、慶長十四年 (一六〇九)、父輝政の築いたものであるが、同十八年、輝政が病死し、あとを継いだ利隆が元和二年 (一六一六) なくなったため、翌元和三年、この城に入部した本多忠政がその人である。忠政は、徳川四天王の随一といわれた本多平八郎忠勝の嫡子で、伊勢国桑名十万石の城主となり、慶長十九年・元和元年の大阪冬・夏の陣に功を立て、また、その後、大阪城から救い出された千姫を嫡男忠刻の室に迎えるなど、將軍家の御おぼえ芽出たく、元和三年 (一六一七)、五万石の加増を得るとともに、千姫入興時の化粧

料十萬石を併せ、二十五萬石の封禄をもって姫路城に入ってきたのであった。

姫路城は、輝政時代に本丸・二ノ丸・三ノ丸ならびに内濠・外濠の工事を完成させたが、西ノ丸と中濠の虎口とぐちはなお未完のままであった。忠政は入部後、この两部分の工事を幕府に願って見事に完成させ、さらに、城下の整備、飾磨への舟運開鑿など、積極的な施政に励んだ。

將軍秀忠は、長女千姫を忠政の嫡子忠刻に嫁がせたこと以上に、忠政の非凡な才能とあつい忠誠心を愛し、黒書院溜間たまりまに出座するよう命じた。そして、幕政の枢機に参与させた。後世、溜間詰の制ができ、親藩および譜代大名、また、老中職をやめたものを優遇してこの席に居らせるようになったが、忠政は、実に、その嚆矢こしであった。また、秀忠は、この室の入り口に本多家の定紋立葵を掲げさせたので、諸臣は、これを「本多の間」と呼んだという。

寛永八年七月（一六三一）、秀忠は病にかかったので、姫路へ帰っている忠政を召した。驚いた忠政は、とるものも取りあえず、夜を日について駕籠をとばした。

「忠臣蔵」では、速水藤左衛門の「早駕籠」というのがある。このときは、「早打二人」の駕籠だけであったが、忠政の場合は随行の家臣がいる。もちろん、最少限度にしほったことであろうが、それでも姫路城十五萬石の城主である。或程度の人数を引きつけていったことはまちがいない、その強行軍という

のであるから、たいへんであったにちがいない。しかも、暑さは最高にきびしい七月、八月のことだ。心身の疲労が過度になるのはあたりまえ。八月十日、江戸西ノ丸下屋敷に着いたときは、ほんとうに、ほっとしたであろう。しかし、案じられるのは前將軍秀忠の容態。一刻も早く、登城しなければならぬ。不安と焦躁に駆られながら、忠政は、とりあえず、沐浴するため湯殿へ入った。しかし、ここまでが体力の限界であった。忠政はにわかに吐血し、危篤におちいった。そして、その夜、五十七歳の生涯を終えたのである。


「東海道五十三次」のことばを聞くと弥次・喜太道中を思い出し、気楽な旅のたのしみを想像するのが常であるが、目的をもち、日時を切りつめられた道中の旅がいかに苦しいものであるか、身にしみて感じられる。

今ひとつ、年代は多少くだるが、「道中の異変」を紹介しておく。

宍粟郡と境を接する美作の領主、津山城十

最新型カラー現像機導入  
カラープリント・スピード仕上げ

良い品を・安く・安心して買える店  
Specialty Camera Shop  
**コーエーカメラ**  
宍粟郡山崎町東鹿沢26-3 ☎2-2089



八万六千石を食む森家の場合である。

森家は、美濃の出身、可成が信長に仕えて身を起こし、山崎合戦以後は秀吉の有力武将となった。あとを継いだ長一（二男）は鬼武蔵おにむさしの異名をとった勇将で、信輝の女婿、すなわち輝政の姉婿であった。天正十二年（一五八四）の小牧山合戦に際し、家康の背後を襲おうと信輝・長一の一行はひそかに三河侵入を企てた。しかし、家康軍に察知され、長久手に要撃されて、一族多く討死した。輝政は、当時二十一歳で、父や兄に続いて斬り死しようとしたが、家臣の番藤左衛門景元に無理矢理本営へつれもどされ、一命を取り止めたのであった。

森家では、長子の可隆が早くなくなり、さきの本能寺の変で三男の蘭丸（長定）、四男の坊丸（長氏）が枕を並べて討死したため、男子としては六男千丸（忠政）ひとりだったのであった。忠政はこのとき十三歳であったが、秀吉はこれを憐れみ、森家を相続させるとともに、美濃の金山城七万石を与えた。

慶長五年二月（一六〇〇）、忠政は信州川中島十三万七千石の城主に取り立てられた。六月、家康は会津の上杉景勝を討つため兵をひきいて東下し、九月には関ヶ原合戦が起こった。忠政は、早くより家康に心を寄せていたので東軍に加わり、中仙道を西上した。

このときの戦は、松尾山に陣取った小早川秀秋の寝返りで西軍が総崩れとなり、一日のうちに勝敗が決したことはよく知られており、秀秋は、この論功行賞で備前・備中・美作の地、七

十五万石の太守となった。しかし、二年後の慶長七年（一六〇二）、二十七歳の若さで病死し、後嗣がなかったため、領地を没収された。そして、備前二十八万六千石は輝政の次子忠継（母は家康の二女、督姫）に、美作十八万六千石は森忠政に与えられた。このときの移封措置には、大阪城の豊臣秀頼を包囲し、これを滅ぼすための遠大な家康の策謀が組みこまれている。すなわち、片腕と頼む女婿輝政とその次子（外孫）を播磨・備前に据え、池田家と姻戚関係にある森忠政を美作、さらに、輝政の実弟池田長吉を因幡に置く布陣は、一朝有事の際、これらの地域を繋ぎ合わせ、中国地方と畿内を遮断する堅固な防壁をこしらえ、これを輝政に指揮させて、西国大名の大阪援兵を阻止する計画であったのである。堅固な津山城は、こうした計画の一環としてつくられたわけで、既にできあがっている姫路城・岡山城・鳥取城と連繋して一大防遏地帯となった。歴戦の勇将、攻城野戦の名手として知られる輝政にこの地帯を掌握させ、思う存分のはたらきをさせるならば、大阪城西方の包囲は萬全である。関ヶ原戦後の家康が、最大目標とした大阪城攻略の第一着手は、こうして、ひそかに、しかし的確に、進められたのであった。

慶長十八年（一六一三）、輝政が中風再発で吐血し、急死したことは、家康のこの計画を頓坐させた。しかし、大阪城は、慶長十九年・元和元年の両役で落城し、豊臣氏は亡んだ。家康の計画した畿内・西国防遏地帯設置は、もはや、必要がなくな



# 株式会社 安井書店

90山崎町山崎郡粟  
TEL山崎②0700(代)

った。それよりも、今度は、西国大名を監視する拠点として姫路城を利用することの意義がクローズアップされてきた。大阪城陥落の前と後とは、姫路城に対する徳川氏の視点は大きく一変したのであって、元和三年（一六一七）の大規模移封は、この観点に立つて行われた。秀忠が最も信頼する本多忠政を姫路城主に据えたのはこうしたことのためで、忠政は、「西国探題職」に補せられていた。

津山城の森家は、こうした転換期をそのまま乗り切り、忠政は、寛永十一年（一六三四）六十五歳で歿した。後嗣長継は、元禄十一年（一六九八）八十九歳で歿するまで家光・家綱・綱吉の三代に仕え、津山藩政の基礎を固めたが、後嗣が短命で、つぎつぎとかわったため、その生涯は波瀾をきわめた。すなわち、嫡子忠継は長継が致仕しようとした直前の延宝二年（一六七四）三十八歳で歿し、三男の長武があとを継いだ。幕府からは、長武のあとは忠継の三子長成に嗣がせるように、との命

があり、十二年後の貞享三年（一六八六）、長成が十六歳になったとき交代した。しかし、長成は、元禄十年（一六九七）二十七歳で歿し、後嗣がなかった。長継はしかたがないので、九男で、家臣の関衆之の養子となっていた衆利をひきもどしてあとを継がせたが、この衆利が津山から江戸に向かう途中、伊勢の桑名で失心し、廃人同様となってしまった。原因ははっきりわからない。何か遺伝的な要素があったのかも知れないが、それを誘発したのは、突然、津山城十八万石の大守となり、家臣の身分から殿様になったときの心の切り替えができなかったことにあるのではなからうか。一藩をひきいて立つ藩主というのは、強健な身体とともに、一を聞いて十を知る伶俐さと、ことに処する確かな判断力、処理力を必要とし、しかも、ものに動ぜぬ強い信念と胆力をもっていなければならぬ。衆利の失心は、こうしたもののどれかに欠陥があったのではないかと思う。

津山藩森家は、これによって潰れた。

さて、池田輝澄発病の周辺をもう少し探ってみよう。

輝澄の父輝政が、慶長十八年（一六一三）、中風の再発によって急逝したことはさきに述べた。母の督姫（徳川家康の二女、良正院）は元和元年二月（一六一五）、京都二条城で疱瘡にかかり、五十一歳で卒した。

輝政の嫡男利隆は、先妻中川清秀の女の所生であるから、輝澄と血のつながりはない。しかし、次男から六男までの五人は、いずれも良正院の所出であるから、同じ血が流れているといわ



ねばならぬ。

まず、次男忠継であるが、元和元年二月、岡山城で疱瘡を病み、十七歳で歿した。母、良正院は二月四日、忠継はそれより二十日おそい二十三日、京都と岡山と、場所こそ遠く隔っているが、同じ疱瘡で歿するとは奇である。

三男忠雄は、寛永九年四月三日（一六三二）江戸で疱瘡にかかり、三十一歳でなくなった。また、弟の五男政綱は寛永八年七月二十九日、二十七歳でなくなり、あとつぎがないため、家が絶えた。

最後は六男の輝興である。正保二年（一六四五）三月十五日発狂し、室、黒田氏（筑前福岡藩主黒田長政女）を殺害して除封された。三十五歳であった。

名将池田輝政のあとも、こうしてながめると、短命者の多いのに驚く。疱瘡というのは、エドワード・ジェンナーが種痘法を発明するまで、ずいぶん多くの人を病死させているが、輝澄の場合は、母と二人の兄をそれで失った。次弟の政綱はどんな病気で死んだかはっきりしないが、末弟の輝興が発狂したというのは、そうした血が池田家にひそんでいたのであろう。輝澄発病の理由はわからないものの、症状としては、父輝政の中風症を受けついでものようである。年令的にはもちろん早い。しかし、栄養を内約され、萬事に心を配る緊張が度を過ぎたことによって誘発されたのではなからうか。

## お稲荷さん物語（上）

根岸 元彦

二、三年以前にこの誌上で、「八幡官物語」という小文を発表したことがあるが、その機会があれば、稲荷信仰についても書くように予告していたので、余り肩の凝らない読み物として今回載せることにしました。

私はよく「おいなりさんはどんな神様ですか」とか、「あれは神様ですか、仏様ですか」などと訊かれることがある。それについて言うと、元々八幡神社というお官は、全国でも最も多い神社の一つだが、すべて鎮守の神様とか氏神様とか、ちゃんとした格式のある神社形式を持ったお官がほとんどである。それに対してお稲荷様は、全国に遍く信者を持ち、形式ばらない小さなお社が多く、又家の庭先やお店の神棚に祀られているのは、ほとんどが稲荷さんであり、昔から日本人の普遍的な信仰を集めている。このような信仰形態を一般に俗信仰ともよばれて、お地藏さんや庚申さん信仰と同様、庶民信仰の代表的な形である。

事実山崎町内を見ても、最も多いのは稲荷社の小祠である。私の受け持つ神社で言っても、八幡神社を始め、元山崎の埴尾神社、北魚町の恵比須神社、加生の須賀神社、中広瀬の稲垣神

社、下広瀬の狐山神社、鶴木の金比羅さん、段の葦原神社、春安の天神さん等には、すべて、その末社といわれる脇宮に稲荷社が祀ってある。

又、町角には本町の元の長生会や、山田の国道脇、中鹿沢には二箇所もあるし、それに、これは又後で触れるが山田町の青蓮寺や、寺町の大雲寺など寺院の境内にまで祀ってある。

それから昔の鹿沢の武家屋敷や旧家の庭先に祀ってあるのも皆お稲荷さんである。郡民病院で今回立派な玉垣を造らして祀られたのも、昔あの土地の地神様として祀られていた、武家屋敷の邸内神社だった稲荷社である。つまり山崎の地も、全国の他の地方同様、遍く庶民がお稲荷さんを信仰していたのである。

一般的に言って日本の神社には大体三つのタイプが考えられる。一つはいわゆる氏神とか産土神<sup>うぶすな</sup>とか、鎮守の神と言われ、地域の住民の信仰によって維持されている神社で、これが日本の神社では最も正統的なあり方とされている。第二は特殊信仰を集める神様で、例えば厄除けの神とか、安産の神様とか、火除けの神様とか特別の神徳を以て信仰される神社。第三は流行神とも言われる神で、商売繁昌、家内安全、無病息災といった何でもかんでも叶えてもらえ、誰もかれもが我先にとブームのように押し寄せてお参りするといったタイプで、お稲荷さんや、戎<sup>えびす</sup>さん、又姫路の鹿島神社などがこれに当る。この外、観光的な神社や、由緒の古さを誇る神社などあるが、この中いづれかに属する。

勿論各神社とも、大小の差はあっても、この三つの要素や可能性を兼ね備えているのは言うまでもない。そして民間信仰とか庶民信仰と言われる信仰形態が起るのは、第三の型の神社なのである。

ではこのような稲荷の神様はどんな神様なのか、一応その故事来歴を誌して置くことにしよう。

稲荷神社の御祭神は、宇迦之御魂神<sup>うかのみたまのかみ</sup>（倉稲魂神とも書く）と言って、宇迦とは食<sup>うけ</sup>の意味で、伊勢外宮の祭神である豊受大神の（うけ）と同義です。つまり一切の食糧を司り、殊に食物の根元である稲穀の生産豊饒を守護される神である。後に江戸時代、稲荷信仰が大流行した際、商売繁昌にまで信仰が拡がっていったのである。今ではまるで金もうけの神様のようになってしまう。こんな所がいわゆる俗信仰と言われる流行神の特徴である。

稲荷神社の御本宮は言うまでもなく、元の官幣大社の京都伏

表装全般

…古いものを  
大切に…

表具師 松本永春堂

山崎町鹿沢本通り  
TEL. 2-0122

本のある生活を—

## さつき書房

山崎町鹿沢 55-3  
☎(07906) 2-4674

見の稲荷大社である。その起源は、元明天皇の和銅四年（七一  
一）二月九日初午はつうまの日に、秦公伊呂具はたのみみいろぐという人が、山城国紀伊  
郡深草村大字稲福の地に、稲荷神社を祀ったのが初めであると  
言われる。其の後弘仁七年（八一七）に弘法大師の請願によっ  
て、時の嵯峨天皇が現在の伏見の地に移されたのであった。お  
稲荷さんは初午の月が祭日というのは、その創祀の日を記念し  
て千年以上も続いているのである。

又よく正一位稲荷大明神と言われるが、この正一位は天皇か  
ら贈られた祭神の神階を示したもので、伏見稲荷は早く淳和天  
皇の天長四年（八二八）に従五位を授けられて以来、段々に上  
昇して朱雀天皇の天慶  
五年（九三二）に最高  
位の正一位まで昇せら  
れたので、このように  
言うのである。その昔  
全国の名神大社には、  
このように天皇から各  
祭神の神格に贈位され、  
朝廷から奉られる幣帛  
の順位が決められてい  
たのだった。  
そして豊川稲荷や岡  
山の高松稲荷のように、

僧侶がお経を上げる稲荷や、又前述のように寺院の境内に稲荷  
を祀ってあるのはどうかということについては、本来なら我が  
国独特の信仰形態である、神仏習合思想から説明しなければな  
らないので厄介なのだが、ここではあまり難しい宗教理論は抜  
きにして、とにかく日本人は外国人から見ても、無宗教民族とか  
宗教音痴と悪口を言われるくらい、宗教現象に対してこだわり  
が無い民族である。

これは日本人の民族性や、風土や、それらに培われて育った  
精神文化によることであるが、昔から、いわしの頭でも何でも  
有難いもの、尊いものだったら拜んだらいいじゃないか、とい  
った無類の柔軟性、弾力性のある宗教心から、全く異質である  
はずの、多神教の神道と、一神教の仏教とを、一緒にたに有難  
く礼拝してしまうような国民性によって、神仏を一つにして考  
えてしまうようなことが起ったのである。だから子供が生れる  
と氏神様へ初詣でをして氏子にしてもらい、死んだらお寺で葬  
式をしてもらうといった事が、当たり前であって誰も不思議とも  
何とも思わない。

こんなことは一神教を信じている外国の、キリスト教徒や回  
教徒などでは想像も出来ない現象である。だから前記のように  
日本人を無宗教民族などと悪口を言う訳だが、これは、われわ  
れの宗教観と彼等の宗教理念との価値観が、根本的に異質のも  
のから出ているのだから、どうしようもないことだ。むしろ我  
々日本人から言わせれば彼等一神教信者等は、現在でも中近東



で回教徒とユダヤ教徒、回教徒とキリスト教徒が血を流して殺し合っている。どれもが宗教の違いが基である。同じ回教徒同士でもシーア派だ、スンニ派だと言って憎み合い殺し合っている。こうして見れば日本人のおおらかな宗教観の方がどれだけ平和的か知れない。日本人は少くとも、宗教が違うと言う理由で人を差別したり、憎んだりは決してしない。日本人同士でお前は法華だ、俺は一向だと言って、宗派の違いが基で喧嘩したなど聞いたことがない。

話が思わぬ方向に脱線してしまったが、我々日本人は、神も仏も有難い。有難いものは皆一緒だという訳で、神も仏も同じ

といった宗教文化が築かれていったのである。

昔弘法大師が京で東

寺の住職をしていた頃、

道ばたで貧しい老人から尊い教えを聞いた。

後でこの老人が稲荷の

神の化身であったと氣

付いて大師は東寺の守

り神として、伏見稲荷

を東寺の境内に勧請し

てお祀りしたと伝えら

れている。

これを見てもお寺の中に、境内の守護神として稲荷社が祀つてあるのも分かるはずである。これは寺院境内地の地守神であり、全国の寺院どこでも見られる。高野山などにも立派な守護神社が建てられてあるし、比叡山の守護神は日吉神社である。反対に神宮寺といって、神社の境内にお寺を建てるのもある。日光東照宮境内の輪王寺などそれである。

特にその中でも豊川稲荷のように、境内のお稲荷さんが本尊の仏様より有名になって、お寺かお宮か分らなくなったような所も出て来る。又その系統で、始めからお寺は建てずに、仏教系の稲荷だけを祀るようなお宮も出て来て、そこでは坊さんがお経を上げることになり、こんな点が庶民信仰の現われで、俗信仰と言われる所以であって、お稲荷さんは神さんか仏さんかどっちだと言われる訳である。

## 近世宍粟郡の耕地造成(上)

〔田井村の畠田の場合〕

古文書研究会

一、近世の新田開発

△はじめに▽

封建制下の各大名は幕府から与えられた石高を内容的にどのように高めて充実した収入として藩財政を豊かにするか。また、農民は家族の食糧をどのようにして確保するかは重要課題で、実質石高を増し、食糧を供給するには耕地の造成をはかるし

創業嘉永元年 きものと共に130余年  
高級呉服の専門店

とくさや

山崎町本町 (さつき通)  
☎(07906) 2-1680代

かない。このため近世は新田開発が盛んにおこなわれた時代であった。近世以前に開発されなかった河川のデルタ、中流域、扇状地、台地、湖沼、干潟などさまざままで、そこでは灌漑施設をつくり、排水、干拓を行ったりして耕地を造成した。

このようにして出来たあたらしい土地には新しい村ができ、新しい村には人口の移住がある。このような村は新田村となる。新田開発がおこなわれた時期は近世に三時期があったとされる。すなわち、イ、近世初期の寛文・延宝年間　ロ、近世中期の元禄年間　ハ、近世後期寛政年間以後であるとされる。

## 二、宍粟郡の耕地造成

宍粟郡の新田、新島に関する文献には、イ、『下村氏手控帳』がある。一宮町の下村氏所属のもので、寛文年間の宍粟郡村々高帳といふべきものであるが、表題を欠くのでこの名称とした。山崎町の西村家からも同様のものが発見されている。ロ、『宍粟郡之内山崎領内覚書』で延宝七年の記銘があり、千草谷の村々をのぞく地域の諸事項が記録されている。両文献から、新田新島についての部分をまとめると、次のようである。

〔イ〕 御領分村々畠ケ田新田増高並地詰減高指引

△下村氏手控帳▽

承応二己	畠ケ田	八町八反六畝十一歩半	横須村	承応三午	畠ケ田	三町五反一畝十五歩半	清野村
明暦元年	畠ケ田	六反四畝二十四歩半	葛根村	明暦二申	畠ケ田	十三町九反一畝十四歩半	宇原村
明暦二申	三西畠ケ田	九反三畝十二歩半	岸田村	明暦二申	三西畠ケ田	一町七反六畝十二歩半	野々上村
明暦二申	畠ケ田	一町五反二歩	生栖村	明暦二申	三西元治元戊畠ケ田	五町一反七畝二十五歩	曳原村
明暦三酉	畠ケ田	九町九反九畝八歩	安賀村	明暦三酉	新田	一町二反九畝十三歩	上野村
寛文二寅	畠ケ田	三町六反六畝十五歩	中村	寛文二寅	四辰畠ケ田	九町四反七畝二十六歩	岸田村
寛文二寅	三卯畠ケ田	六町二反八歩	神戸市場村	寛文二寅	三卯四辰畠ケ田	五町九反三畝二十一步	須行名村
寛文二寅	三卯四辰畠ケ田	八町六反三畝二歩	神戸伊和村	寛文三卯	四辰畠ケ田	四町四反二畝十四歩	神戸安黒村

また、開発の主体者別の分類では、藩営新田、代官見立新田、藩士知行新田、町人請新田、村請新田などがあり、小規模で農民が個人的に耕地の近くで行なうのは切添新田とよばれた。このように全国各地で「新田」開発が行われたが、われわれの郷土宍粟郡を考えてみると、「新田」開発などというような大規模な事例はないように見えるが、史料を注意深く検討してみると、やはり耕地造成のために農民達が努力した跡をたどることができると。

寛文三卯畠ケ田 二町五反二畝十二歩 神戸島田村

寛文四辰畠ケ田 一町五反九歩 高所村

寛文四辰畠ケ田 二町七反八畝二十歩半 下町村

寛文四辰畠ケ田 二町四畝十八歩 野田村

寛文四辰畠ケ田 二町六反 谷村

寛文九酉畠ケ田 二町九反五畝二十七歩 須賀村

寛文十戌畠ケ田 三町五反七畝二十四歩 木ノ谷村

〔ロ〕 新田 畠田 新畠年貢納所不仕分

一、永野山新田 五反程

右は卯年より少々ツツ致シ当未年迄畑仕候 右之内ニ家建居申候ニ付 未タ斗代不定来申年より年貢納所仕時畝数改輕ク斗代相究遣シ可申候

一、高下村新畠九反程

右は巳ノ冬相断 午ノ春より発畠ニ仕候 沓反ニ付大豆沓斗六升ツツニ六年目亥年ニ畝数改年貢納所可仕旨申渡候

一、堂川本 新畠 五反程

右は午ノ春相断春中ニ発畠ニ仕候 沓反ニ付大豆式斗宛ニ相究 六年目亥年より年貢納所可仕旨申渡候

一、荒発畠 沓反五畝

右ノ荒発 寅ノ春相断発畠ニ仕候六年目当未ノ秋より年貢 大豆沓斗ツツ納所可仕旨申渡候

一、新田畠田 四反程

右新田畠ケ田 寅年より発田ニ仕候 六年目当未ノ年畝数相改 沓反ニ付印下下田並ニ米三斗ツツ年貢納所可仕旨申渡候

一、新田 沓反程

右新田寅年より発田ニ付六年目当未ノ年 畝数改沓反ニ付印下々田並ニ米三斗ツツ年貢納所可仕旨申渡候

一、新田七反沓畝二十四歩

杉田村 又兵衛

寛文四辰畠ケ田 六町三反九畝十歩半 宇原村

寛文四辰畠ケ田 二町四反六畝十七歩半 矢原村

寛文四辰畠ケ田 七町三反四畝二十三歩半 下牧谷村

寛文四辰畠ケ田 一町四反九畝十八歩半 杉田村

寛文四辰畠ケ田 一町三反十四歩半 倉床村

寛文十戌畠ケ田 一町四反四畝六歩 三津村

〔延宝七年 完粟郡之内山崎領内覚書〕

日見谷村 庄屋 三郎兵衛

杉田村五兵衛 長右衛門

西安積村中

賀生村之内 山崎町 大津屋助左衛門

都多上野村 九右衛門 与九郎

都多下野村 善兵衛



内 三反壹畝二十四步 当末年より年貢納所可仕分

四反 当申年より年貢納所可仕分

右之新田丑ノ洪水ニ流田寅卯兩年より癸田仕候ニ付壹反ニ付米三斗三升宛遣申候

一、新田貳反六畝壹步 野田村之内 千草屋源右衛門

右新田丑ノ洪水ニ流寅年より癸田ニ仕候ニ付壹反ニ付三斗ヅツニ相極当末年より年貢納所可仕分

一、新田六反八步 清野村之内 五十波村 九郎左衛門

内 壹反拾九步 当末年より年貢納所可仕候

四反九畝拾九步 来申年より年貢納所可仕候

右之新田ノ洪水ニ流田寅卯兩年ニ癸田ニシ仕候ニ付壹反ニ付米三斗五升ヅツニ相究遣申候

一、新田壹反六畝二十六步 木ノ谷村之内 中町村徳右衛門 五十波村九郎左衛門

右之畠丑洪水井堰潰水不掛ニ付寅年より癸畠並壹反ニ付大豆三斗ヅツニ相究当未より 年貢納所可仕分

一、新畠壹反貳畝壹步 杉ヶ瀬村 中町村徳右衛門 山崎町 祐閑

右新畠丑洪水ニ而水不掛ニ付印下々畠壹反ニ付大豆壹斗ヅツニ相究当末年より年貢納所可仕分

一、新田壹町六反拾貳步 岸田村与三右衛門

右之新田寅年より癸田ニ仕 壹反ニ付米四斗ヅツ相究当末年より納所可仕分

一、新田貳町三反八畝拾貳步 岸田村

右之新田卯ノ年此方より役人ニ而田ニ仕出来申候所同年秋之洪水ニ而上土流立毛悪敷ニ付去午年毎秋立毛見分上ニ而引  
引遣

一、須賀村先年之洪水ニ付谷川筋堀川ニ仕就夫河原穴地ニ有之ニ付去午ノ冬此方役人ヲかけ新田ニ仕掛候

畝數八反余有之候当春新田仕立可申処ニ數馬死去ニ付今ニ不仕掉も入不申其捨置申候

一、田畝數壹町六反余 生栖村之内 田ノ尻分

畠畝數壹町壹反余

右之田畠請所ニ申付米壹石八斗余 大豆貳石五斗ニ相定作仕候処ニ作り捨田畠差上ゲ候ニ付生栖村百姓共ニ惣作ニ

申付候処ニ去年ノ冬安積忠左衛門右請所之通ニ田畠請取作仕度与相断候ニ村惣作分ニ申付置候

〔完栗郡之内山崎領内覚書〕に備後守代より年々申出畠ケ田覚として計百二十三町六反二畝余を記しているが、これは下村氏手控帳と殆んど同様で生栖村 曳原村 上野村はなく木ノ谷村（三町五反余） 三津村（彦町四反余） 須賀村（式町九反余）が記載されていることと岸田村が十三町八反、野々上村が五町三反余に増加していることが異なる。

〔ハ〕 畠ケ田の意味と郡内での造成地

両史料を検討するとき、畠ケ田の意味を明らかにしておく必要がある。

畠田というのは畠ケ田とあるからハタケダと読むのである。辞典では「畑田」とかいてハタダと読ませ、松江藩において畑と田の転換が可能な土地をいうとあり、また「畑田成」ハタタナリは畑を田に転換すること。畑田成が行なわれた場合に上畑は上田に中畑は中田に下畑は下田となるが一般的で石盛の増加分は「畑田成石間出高」（ハタタナリコクマデダカ）として村高に加えられ年貢諸役も増加した。△日本史用語辞典▽したがって完栗郡の場合も畠を田に転換するが石盛の増加基準はちがっていた。

完栗郡では「新田」は僅かで殆んどが「畠田」造成であった。これについていえることは、

a、畠ケ田造成が承応ノ寛文の頃に多いのは先にのべたよう

に全国的にいわれる近世初期と言われる時期と一致する。

b、畠ケ田造成が多いのは、宇原・岸田で、これは掛保川沿いで、広い堆積地があつて、そこは堤防さえ築くと良い耕地がえられたのである。野々上・矢原・中・高所なども同様である。

c、神戸市場・須行名・伊和・安黒・島田は地続きの村で掛保川沿いだけでなく、山麓傾斜地の開発をおこなったのはなかるうか。曲里井堰からこれらの村々をつらねる水路があつて、伝承では太閤さんの時代といい、一宮町史には寛政年間の絵図が掲載されているが、この水路の原形は近世初期とみるべきではなかるうか。

d、引原川流域では曳原・上野・谷・杉田にも畠ケ田が多く造成されているが、堤防（川除）によるか、山裾の開発によるかさらに調査が必要である。

e、伊沢川、志文川、染河内川等も開発の余地が残っていた。〔二〕 耕地開発の時の基準

新田、畠ケ田などを造成したときには、その苦勞にたいして領主の側から、特典が認められた。

△寛文年間の定▽…下村氏手控帳

a、百姓たちが独自におこなった時

二年間は大豆で三年目からは等級をきめて納めること。

等級をきめるときには、査定よりも一ランク下にきめる。下々田になったときは、印下々田とする。

畠ケ田の面積を測量して以前の面積よりも多くなっても以前のままとする。

初畠は五年間は年貢なし。

六年目に年貢を納めるが、このときは、単位生産額（斗代）を低くする。（万治元年十月一日の極り）

百姓がおこなった畠ケ田や、新屋敷で小規模のものは、大きくまとまった時に査定をする。（寛文七年九月極）

b、領主側からの申付によるもの

畠ケ田が完成した年に査定（検見）年貢はおさめること。

若し面積に不足があるときは、そのまま（明暦元年極）。

畠ケ田造成のために、屋敷替えまたは、新畠に家を建てた時には三年四年目より、その村の下畠並の斗代とする。古畠に家を建てた時は二年間は野年貢、三年目より、その村の屋敷斗代とする。

村々新家屋の取り調べは郡奉行が村に検見のためにでむいたとき、または、中三年置いて五年目ごととする。

c、「山崎領内覚書」では六年目から年貢おさめさせた。

〔ホ〕 いろいろな開発者

山崎領内覚書によると、野田村の内で式反六畝余りを千草屋源右衛門が開発している。面積はすくないが千草屋源右衛門が開発していることは意味深いことである。彼は鉄山師と

して多くの利益をあげ大坂に出店をして鉄問屋、大名貸しも行なった家である。また彼は岸田村の畠ケ田にも関係している。

鉄山経営で得た利益を土地開発にも投資して利益を得ようとした。史料を欠くけれども、もっと広い土地の開発に投資していたのではなからうか。すなわち町人請の形である。

清野村、木ノ谷村の開発に名のみえる五十波村九郎右衛門、木ノ谷村・杉ヶ瀬村に名のみえる中町村徳右衛門、杉ヶ瀬村に名のみえる山崎町祐閑、加生村に名のみえる大津屋助右衛門については、史料が不足であるが祐閑という名前からして医者とも考えられる。

大津屋は商人である。町人請の分類に入る。

西安積中とあるのは西安積村が、岸田村とあるのは岸田村の百姓が請け負ったということ。『百姓請』であり、日見谷村庄屋三郎兵衛は代表が庄屋であって、やはり百姓請である。

外科・内科

山中医院

院長 山中陽一

山崎町西町・TEL ②0036



また、杉田村五兵衛、長右衛門、都多上野村九右衛門、与九郎、都多下野村善兵衛、岸田村与三右衛門などは、村内の有力農民の手によるものである。

### 古地名小噺(其の一)

## 字地名「<sup>アマガハナ</sup>尼ヶ端」の伝説

資料部

役場の字地名を見ると、最上山の展望台付近一帯を「アマガハナ」と印るされている。又古文書では尼ヶ鼻と書かれている文書をよく見かける。天文の昔、上の山先き端<sup>ハナ</sup>に尼子勢の物見櫓有りたり(宍粟郡誌) 伝記によれば、天文年間尼子詮久中国一円を風靡す。其の攻める事急なるをもつて播磨の諸城尼子氏に降る。宇野氏も又尼子の下に属せしと言う。時に尼子勢シシ沢の地に砦を築き守勢を置き、上の山の先き端に物見櫓を設けて宍陽を監視す。人々「尼ヶ端」と呼称せり、然るに永禄の頃、尼子の守勢に江津の三郎と其弟四郎と申す兄弟の代官有り、兄の三郎は風庸なれども弟の四郎はその性横暴なり、常に大酒を喰らい女を拉致して己を慰む、里人恐れて嫌悪す、其後尼子氏次第に衰微して手勢も少くなりぬ、或る夜代官江津の四郎大酔して熟睡せる処何物かに襲はれ寝首を欠かれ、兄の三郎又遁

走す、永禄九年、時を同じくして尼子氏の牙城月山富田城毛利氏によって攻め落さる、これより山崎の砦、物見櫓等、こと如く宇野氏に帰す、四郎の首は鼻を削ぎ取られて尼ヶ端に晒らされたり。当時の雑句に、「尼がハナ、寝首欠かれて鼻は無し」人呼んで尼ヶ鼻と言いしとぞ 又近世の句に、「朝霧に 墨絵の如し雨がハナ」と言う句もある。

(利仙筆録) ヨリ

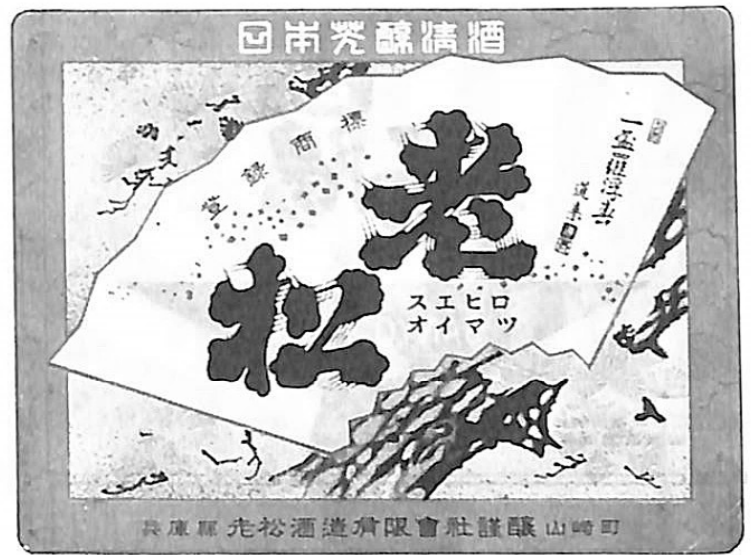
「利仙は山崎藩士にして山下寛左衛門と云う文化文政の頃の人なり」

## 春の旅行記

事務局長  
安井 清介

旅行には何と言っても天候が一番気になります。雨天決行である以上雨降りでも実施しなければなりません。この朝一時四十分頃、雨の音を聞いて用便に行ってから朝には雨がやんでくれるよう寝床の中で念じておりました。

六時半頃鞆には傘を入れていたが、雨は幸いにやんでいました。天は郷土研究会の旅行に幸いしたのでしょう。六時半すぎ神姫バス乗車場へ行って乗車される方の受けをいたしました。一号車は福山清一氏、西塚一義氏、二号車は志水正信氏、久保寅夫氏、三号車は沢田友栄氏と私が各車の責任者になっていま



した。一号車四十六名、二号車四十八名、三号車四十七名、全員一四一名の参加でした。

予定通り七時三十分頃出発しバス三台を連ねて山崎インターより中国自動車道に入り、幾分曇っていましたが一路東へ向いて走り、吹田から近畿道、西名阪を経て天理インターを降りました。途中赤

松と香芝サービスエリアでトイレ休憩をして天理教本部へ十一時前頃到着いたしました。門前の塚本さんが出迎えに来られて案内をしていただき神殿前へ行き、各号車別に分れて説明される人の案内で神殿にあがってから教祖殿、祖霊殿と美しく磨かれた六〇〇メートルにもなる長い廊下を見学してまわりました。予定の時間が三十分ばかり超過して次に安倍文殊院へ着きました。

この寺は日本三文殊の第一霊場になっていて孝徳天皇の勅願によって大化改新の時に左大臣となった安倍倉梯磨呂が安倍一族の氏寺として建立したものです。本堂へあがって本尊文殊師

利菩薩を礼拝しました。木彫極彩色の騎獅像で高さ七メートル、右手に降魔の利剣を持ち左手に蓮華を持ったいわゆる渡海文殊です。本尊右前の善財童子像、本尊右後の優填王像も共に鎌倉時代、快慶の作で重要文化財です。また台座の獅子は安土桃山時代の作でこれも重要文化財となっております。

本堂を出てすぐ近くに特別史蹟西古墳があつて洞穴の中を見学しました。玄室には「願かけ不動」がまつられていました。この古墳はこの寺の創建者、安倍倉梯磨呂の古墳と伝えられております。

文殊院の見学を終って桜井の牡丹飯店で昼食をした。午後の見学は長谷寺と談山神社だった。長谷寺は駐車場から門前まで約一軒の道を徒歩で行った。花のみてらと言われ牡丹の寺として有名ですが、時期を失して枯れた花を手入れをする人らが摘みとっていました。桜も吉野と並び千年来の名所となつています。「いくたびも参る心は」と御詠歌にあるようにたびたび参ることが良いでしょう。長谷寺は真言宗豊山派の総本山で末寺は三千余ヶ寺といわれております。本尊は十一面観世音菩薩です。ふつうの十一面観音と少しちがって右手に錫杖を持ち平らかな石に立っておられます。立派な五重宝塔もカメラに収めました。長谷寺の見学を終えて両側に土産物屋が並ぶ街並みを歩いて駐車場へ帰りました。バスの出発時刻に遅れた方が一号車にあつて天理教でも長谷寺でも世話役の人に大へん気をもませました。



次は最後の見学地談山神社へ向かい駐車場からしばらく山道を歩いて朱塗極彩色の春日造の本殿に参拝しました。祭神は藤原鎌足公で拜殿、権殿、神廟その他朱塗りの立派な建物でした。中でも木造十三重塔には驚きの眼を見はりました。

四時半をまわって全見学を終え桜井市を出発して帰途につきました。天候にも恵まれ事故なく予定より約三十分遅れて午後八時三十分頃山崎へ帰ることができました。郷土研究会の旅行は会員の方々が楽しみにしておられます。会員の方々の為に精一杯お世話をさせていただいております。今後もできる限りご参加下さるよう希望いたして拙い文を終わります。

### 事務局だより

一、「山崎史跡めぐり」は残部がありますので、ご希望の方は事務局へお申出下さい。

二、秋の研修旅行案内を会報に挿入しています。

参加ご希望の方は早目にお申込み下さい。

三、会報に広告掲載希望の商店はお申出下さい。

広告料は年間六、〇〇〇円です。

山崎郷土研究会事務局 山崎町

安井清介宅

# 山陽 盃

清酒

SANYO HAI

兵庫県山崎町山崎  
山陽盃酒造有限会社

## 食品の店

# いまや

さつき通り4丁目  
TEL②0169

# 和洋菓子 松月堂

兵庫県山崎町  
電話②〇〇六一番

健康づくりの相談が気軽にできる店

# ごころ薬局

薬剤師 岸本八重子  
岸本弘子

山崎町東和通り・☎(07906)2-1190